

「青少年のための科学の祭典」新潟県上越大会が11月18(土)・19(日)の両日、上越科学館で行われ、18日(土)には1,444人、19日(日)には約1,500人が来場しました。

新潟支部は、19日(日)に出展し、立ち寄ってくれた約150人の子どもたちに「雲の模型」作りを体験してもらいました。

「青少年のための科学の祭典」は、「青少年に科学の魅力を体験してもらおう」とのねらいで、平成4年(1992年)東京・名古屋・大阪で行われたあと、国の委託事業として、平成12年(2000年)までに全都道府県を一巡しました。

その後も、夏・秋・冬・春と、開催時期はまちまちですが、各地で継続されており、今年も33都道府県51会場で行われます。新潟県内では燕・弥彦大会も行われました。

上越科学館では、以前から引き続いて行われ、コロナで2年中止したものの、一昨年には万全の配慮をしながら再開しています。

新潟支部では早い段階からほぼ毎年参加しており、一昨年には2日間フルに出展しました。

ただ、新潟県は南北に広く、県都から130km離れた上越科学館まで来て頂くのは、交通機関も不便で自家用車を使うしかない所もあり、大変なので、昨年からは1日だけの出展としています。

昨年は、コロナの第八波も心配される中、3,000人を超える来場者を迎えたことから、イベント終了時のミーティングで「来年はコロナの心配もなくなり、来場者は5,000人を超えるかも知れないので、早めに準備をしていただきたい。」と科学館の館長は挨拶をされていました。

今年の2日目開始の挨拶で館長は、「今年は、18、19両日も、余り好天は望めないため、来場者の出足が鈍るのではと心配していたものの、まずまずの天気の中、18日は1,444人の来場があった。これまで2日目の方が来場者が多かったことから、今日は1,700人位の来場者が期待できる。」と話されましたが、16時時点で約1,500人の来場者があったことが知らされました。

ロビーでは、科学館出展の化石の発掘体験、石膏で固めた岩石を割るとオウムガイのレプリカの化石を掘り出せるコーナーや、星のキーホルダー作り、宝箱作り、虹色になる金属、木の実などで作品作りなど沢山の楽しい体験ができました。

「雲の模型を作ろう」のブースは、昨年同様、奥まった特別展示室になりました。前日18日に「偏光板を使って万華鏡を作ろう」というイベントが行われた同じ場所です。

特別展示室には、大学生たちと協力して醸造や酵母を知るブース、ストローのトンボ作り、リングキャッチャー、リサイクル検定、太陽電池や風力発電、燃料電池車などの発電の体験などのブースも入っていて、子どもたちの興味を引いていました。

予報士会のブースは少し目立ちにくい感じでしたが、子どもたちを連れてきた両親が子どもたちに沢山の体験をさせようと意気込んで、ぐいぐい引っ張っていくように、多くのブースに立ち寄っていることもあり、約150人が来場しました。

上村相談役は、朝5時に自家用車で家を出て、信号にほとんど引っかからずに、明るくなる前に会場に着いていました。追加の綿や浮沈子、水竜巻も持ってこられました。阿部支部長は新潟市西区から自家用車で参加されました。雲を作る実験のペットボトルやパソコン画面を使って色んな雲の写真を見せたり、雲のできる仕組みを詳しく説明し、子どもたちも喜んでくれました。

新潟県は南北に長く、会場の科学館は県都から130kmも離れており、ほかのスタッフもここまで来るのは大変です。電車や高速バスではなかなか思うように早く到着することはできないため、自家用車を駆使して暗い内に出発するしかないという難しさがあります。そんな中、今年は上越圏内から4人が参加しました。もっと上越在住の予報士が増えるといいなと思いました。

皆さんは早めに来られたので、持参した雲の写真を養生テープでパネルに貼り、机に必要な材料を並べるなどの準備作業が直ぐに終わり、オープンまでゆっくり待つことができました。

今年も、イベント中の、会場内外の情報共有を目的に各ブースに「速報」が配られました。2日目の19日は「5号」が最初で、6号には開館5分前には昨日人気ブースの予約が取れなかったためにリベンジを目指し早く来た人が多く「9時開場前に、受付前には長い行列ができた」と情報共有されました。



雲の模型指導

開場の9時頃にはロビーの各コーナーに沢山人だかりができましたが、特別展示室に子どもたちが流れて来たのは、9時半頃からでした。

その後新潟支部のブースにもだんだん立ち寄る子どもが増え、昼前後のピーク時には満席になりました。

小学4年生では、お天気に関連する授業があったのか、関心が高くなっていたようで、仲良し3人組や男子数人など、グループで体験していききました。

「(スタッフの)話をしっかり聞いて」と注意をしながらサポートしてくれる父親に背中を押されながらも、「自分のやりたいようにやるんだ」という意思表示か丁寧に綿を成型して貼っていった子など、いろんな子が来てくれました。毎年のように来てくれている子も何人か居て、そういう子らは友達と競い合うように何も教えなくても自分でどんどん仕上げていききました。

去年1歳でチャレンジしてくれた女の子が、今年も来てくれて、聞いたらまたやってみるということになりました。当方のサポートは手厚かったものの、飽きずに仕上げていききました。

阿部支部長は、パソコン画面を見せながら雲の特徴、天気から水の振る舞い、色んな雲、大気光学現象など多様な解説も交えて分かりやすく解説していました。持ってきたペットボトルの水竜巻、浮沈子、雲作り実験も面白かったようです。

支部で作った幟は今年も会場に飾りました。萌葱色の鮮やかな幟は室内でも良く映えました。

閉会の挨拶で、永井館長は、昨年「来年はコロナ明けで、来場者が5,000人超えることも考えられる、皆さんはそのつもりで今から準備をして頂きたい。」と言っていたことに言及し、「天気は悪くなかったが、読みにくい天気で目論見が外れた」と言っていたことが、2日間で3,000人を集めたので成功と思います。

館長は「あと数年、現役を続けたい、その間はこのイベントを続けたい、引き続き協力をお願いしたい。」と締め括られました。

支部では、今後は引続き参加していきたいと思います。また、ペットボトルの雲、浮沈子、水竜巻が好評だったので、アイデアを募集して「ミニ実験コーナー」や、「ミニ天気教室」のような企画も考えてみたいと思います。